

緑の論壇

「日本林政ジャーナリストの会の42年」

林政ジャーナルから見た我が私的回想

日本林政ジャーリストの会会長 上松寛茂



シヨナルトラスト運動の発祥の地となった。世論に押され、林野庁は伐採凍結に追い込まれた。森林を産業としての経済的視点から環境重視の姿勢転換へのきっかけともなり、新たに生物資源遺伝保存林指定の方針が打ち出された。

環境的視点からは、二〇〇二年一

コロナ禍で、「日本林政ジャーナリストの会（林J）」のメンバーによる日本の森林林業取材は中断状態に追いやられ、最近はおんラインによるZoomで定例研究会を実施。全国各地の

森林林業現場への共同取材、現地研究会は果たせないでいる。このため、最近の森林林業情勢に疎くなっている。こんな時は当会の来し方行く末を考えてみるのも悪くない。

森林林業の在り方を林政ジャーナルに
当会の設立は一九七九（昭和五四）
年二月。農林水産省の農政記者会所属
の一般紙と業界紙の林政記者クラブに
在籍していた個人参加でスタートし
た。設立趣意書を見ると、「我が国の
林業は年を追って厳しさを増し、木材
需給、林業生産基盤の強化、公益機能
の発揮、国有林野事業の運営面など多

難な問題を抱えている。今後の森林の
在り方や林政の進むべき方向をジャー
ナリスト活動を通じて提起していき
たい」という使命感を掲げている。

設立第一回目の定例研究会は東京・
永田町ビルで下河辺淳国土庁事務次
官（当時）による「田園都市構想と
森林」がテーマ。これは書籍にもな
った。一九八四（昭和五九）年には「山
村は、いま―都市化にゆれるふるさと
」（清文社）、一九八九（昭和六四）
年には「わたしたちの森 国有林を
考える」（同）を林Jの研究成果とし
て出版。森林林業の振興にマスコミ・
ジャーナリズムの立場から積極的に
発信・貢献してきた四二年間の歴史
がある。農水省の会議室やプレスセ
ンターで月一回のペースで研究会を
開催。当会発行の林政ジャーナルに
発表。既に六〇号を数える。

一九九六（平成八）年二月当時の会
員は一一三人、二五賛助団体だったが、
会員の高齢化などで現在は半減、木材
不況をはじめ、林業の低迷は当会の浮
沈にも大きく影響した。設立当時も現
在も森林林業をめぐる状況の厳しさは
同様だが、果たすべき役割と期待は段
違い拡大している。

一九八七（昭和六二）年五月、筆者
は有楽クラブ（東京都庁）から農政記
者会に配置替えとなり、林Jにも入会。
マスコミ各社では通常一、二年でクラ
ブ替えとなるが、林Jには個人資格の
ため、一年間で農水省を去った後も継
続。以来三四年間在籍したことになる。
といってもこの間地方支局デスクへの
転勤もあり、事実上の空白を含めて。
筆者の農政記者会での初仕事は「知
床の森伐採問題」だった。古都鎌倉
や和歌山・天神崎と並んで日本のナ

月発行の林政ジャーナル三三三号には、
C・W・ニコルさんによる定例研究会
での講演録が掲載。農水省の会議室が
満員になるほど聴衆が集まり、日本の
森林の素晴らしさと森林保護の大切さ
を訴えていた。翌年六月には、長野県・
信濃町のC・W・ニコル・アファンの
森財団の「アファンの森」（一八〇〇）
を訪ねた。満州開拓引き揚げ農民が開
墾、荒れ放題の「窒息寸前」だった放
置林にトチ、ブナ、ナラなど広葉樹、
落葉樹を中心に植林、見事に再生され
た森林を見た。会員一八人が参加した。
英国ウエルズ生まれのニコルさんは
長野県・黒姫高原に住み、昨年四月に
七九歳で逝去された。惜しい人だった。
合掌。

日本の公害の原点とされる旧足尾銅
山周辺の森林再生事業と男体山の治山
事業取材（一三人参加）は二〇〇三年

十一月(同三七号)。筆者は農政記者会で当時の田中高尚林野庁長官らと視察。後日、勤務先の共同通信年間シリーズ企画「木と語る」で自社へり取材、見聞き全面カラーで「よみがえる死の山 足尾銅山のへり緑化作戦」を一九八八年九月に配信、全国の地方紙の紙面を飾った。一九八九年に同社から同名で出版もしている。

二〇〇四年には縄文杉で知られる屋久島取材(同四一号)が実現した。一人三百円の入山協力の積極的な姿勢が印象に残った。有志の何人かは宮之浦岳に登山。尾瀬取材では燧ヶ岳、高知の林業の町、梶原町では石鎚山、秋田では鳥海山など共同取材ついでに登山の決行が恒例となった。メンバーは皆若かった。

白神山地学術調査を実施

一九九四年七月には、林Jは林野庁の特別許可を受けて青森・秋田県境の世界自然遺産に登録された白神山地学術調査を実施(同一一号)。林野庁関係者とともに三泊四日の行程で会員二人が参加した。ブナ原生林を詳細に見て回り、森林保護の在り方や国の予算の一般会計からの組み入れなどを求

める報告書を作成。毎日新聞や日本農業新聞に詳しく連載された。

独立採算制だった林野特別会計は三兆円を超える累積債務を抱えていたが、公益的機能重視への転換からこれを廃止、一般会計に組み込まれるという画期的な出来事もあった。

公益機能の極致ともいえる地球温暖化防止に向けた一九九七年の京都議定書は温室効果ガス(CO₂)の削減目標を一九九〇年比で六%削減を約束、このうち森林吸収分三八%確保は「木づかい運動」や年平均五五万鈔の間伐などで達成。二〇一一年一〇月に秋田



日本で第1号の森林認証を得た速水林業(和歌山)の林業地を取材

県の能代バイオマス発電所にも足を踏み入れた。令和三年一〇月二六日の菅義偉首相は衆院での所信表明演説で「二〇五〇年までにカーボンニュートラル・脱炭素社会を実現する」と世界に宣言。森林に期待される役割はますます大である。

高層木造建築を可能にした次世代の新建材、CLT(直交集成版)については、一九一四年六月、森林総研を訪問、開発状況を聴き、二〇一五年一二月に岡山県真庭市の銘建工業のCLT製造現場を取材、真庭バイオマス発電所も見学した。二〇一六年二月には林



ある日の林J定例研究会風景

野庁会議室での定例研究会で同社の中島浩一郎代表取締役からCLTの展望を聞いた。

求められる森林林業の検証と提言

大きな取材テーマだった木材需要の拡大は、ここに来て木材価格が急上昇、ウッドショック現象が起きたが、二〇一六年三月の第三三回定期総会で東京五輪の会場となった新国立競技場を設計した隈研吾東大教授による木を多く、有効に使用したその背景を語っていただいた。

二〇一九年に成立した森林環境税・森林環境譲与税は国民一人当たり千円を徴収するが、これを知る国民はどれほどいるか。抱き合わせの森林経営管理法についても危惧するところあり。森林は林業者だけでなく国民全体で守り育てるもの。マスコミ・ジャーナリズムに求められる検証と監視に対する期待は大きい。ドローンなど最新機器を使用したスマート林業などの今後の森林林業の在り方を考えると身が引き締まる思いである。